

# 特別ニーズ教育・専攻科づくり運動の始まりと課題

田 中 良 三

はじめに

## 1. 専攻科設置の現状

- ① 専攻科とは
- ② 障害児学校と専攻科
- ③ 後期中等教育の多様な場で

## 2. 後期中等教育保障の発展形態としての専攻科づくり

- ① 養護学校高等部の拡充と高等部卒業者の進路実態
- ② 障害児の青年期形成と専攻科への期待

## 3. 全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会の発足と活動

- ① 発足までの歩み
- ② 出発期の活動

- 1) 第1回全国専攻科研究集会と第1回設立総会
- 2) 第2回全国専攻科研究集会と第2回定例総会

おわりに

はじめに

青年期の知的障害やLD・ADHD・高機能自閉症など、特別な教育的ニーズをもつ発達障害をもつ子どもたちの後期中等教育保障の延長の場であり、また、新たな学びを開く専攻科づくりについての全国的運動が始まった。

本稿では、生成期の特別ニーズ教育における専攻科づくり運動について検討する。

## 1. 専攻科設置の現状

### ① 専攻科とは

専攻科は、学校教育法第1条に規定する学校（1条項）のうち、高等学校・中等教育学校・大学（短期大学を含む）・高等専門学校に設置することができる。対象者は、当該の学校を卒業もしくはそれと同等以上の学力を有する者で、「清深な程度において、特別な事項を教授し、その研究を指導すること」を目的に、1年以上の修業年限を設定している<sup>1)</sup>。

### ② 障害児学校と専攻科

障害児教育では、学校教育法第48条の高等学校の専攻科・別科に関する設置条項に基づき、盲学校・聾学校・養護学校（以下、障害児学校）に第76条の準用規定により、各高等部に専攻科の設置が可能である。統計上、専攻科に進むことは「進学」として扱われるが、法的には上級の教育階梯ではなく、同じ教育階梯における継続教育機関として位置づけられる。また、障害児学校高等部も含め、後期中等教育における専攻科を修了した後に、「研修科」を設置している例もある。

専攻科を設置する障害児学校の数は、統計上、正確に把握できないが、2003年度、盲学校102学科（高等部設置校59校）、聾学校72学科（高等部設置校70校）、養護学校7校（663校）である。このうち、専攻科を設置する養護学校7校はいずれも私立の知的障害養護学校である<sup>2)</sup>。〈表1〉は、高等部専攻科を設置する私立養護学校である<sup>3)</sup>。

〈表1〉 高等部専攻科を設置する私立養護学校

(学校名)	(所在地)	(設置年度)	(修業年限)	(現員) <04年度>
いずみ養護学校	宮城県	1969年	2年	35名
光の村土佐自然の家	高知県	1975年	2年	18名
旭出養護学校	東京都	1981年	3年	16名
聖坂養護学校	神奈川県	1985年	2年	19名
若葉養護学校	群馬県	1994年	2年	19名+研修科2名
聖母の家学園	三重県	1995年	2年	37名
三愛学舎養護学校	岩手県	1996年	2年	19名

## ③ 後期中等教育の多様な場で

上記の私立の知的障害養護学校以外に、知的障害、LDなど「軽度」発達障害児のための高校卒業後の進学先として下記の種別や設置形態も多様な学校に専攻科が設置されている<sup>4)</sup>。

＜表2＞ 専攻科を設置する高校等

(学校名)	(所在地)	(設置年度)	(修業年限)	(現員) <04年度>
NPO法人見晴台学園	愛知県	1990年	2年	4名+青年部3名
私立鹿児島城西高校	鹿児島県	1999年	2年	20名
やしま学園高等専修学校	大阪府	2003年	2年	31名

## 2. 後期中等教育保障の発展形態としての専攻科づくり

## ① 養護学校高等部の拡充と高等部卒業者の進路実態

かつて、障害児教育において、盲学校や聾学校に較べ、知的障害養護学校中等部及び中学校障害児学級からの高校進学率はきわめて低く（1980年、知的障害養護学校中等部は50.3%、中学校障害児学級は37.2%、いっぽう、盲学校・聾学校はほぼ100%）、その格差は著しかった＜表3＞<sup>5)</sup>。しかし、1980年代後半に入って、全国各地で「15の春を泣かせない！」をスローガンに、養護学校高等部希望者全員進学をめざす運動が繰り広げられるなかで、今日では、養護学校中学部や中学校特殊学級の卒業生の進路先は、養護学校高等部等への進学がほとんどを占めるようになってきている。そして、＜表4＞<sup>6)</sup> みるように、養護学校高等部は年々増設されて生徒数も増え続けている。その結果、2003年度の進学率は、知的障害養護学校は96.1%、中学校障害児学級87.3%となり、かつて見られた盲学校や聾学校との大きな格差はほとんど解消され、障害種別や都道府県との格差も無くなりつつある＜表3＞・＜表6＞<sup>7)</sup>。しかし、そのなかで、＜表5＞<sup>8)</sup> ＜表6＞に見るように、高等部卒業後の進路問題が深刻化しはじめている。

それは、高等部生徒の障害が重度化・多様化するとともに、不況や産業構造の変化等により、就職率が低下してきていること、また、たとえ就職しても3

年で4割近くが離職していること（通常高校卒業生の場合には5割近くが離職するが同時に転職する）、福祉施設に入・通所する者が大半を占めるとともに、いずれの進路先にも含まれない不明の「その他」が次第に増えてきていること、そのいっぽうで、とくに知的障害者養護学校の進学率は1%に満たない（養護学校全体でも4.2%）劣悪な状況にあること（＜表6＞のように、盲学校の43.4%、聾学校の47%の43～47分の1にすぎない）などである（通常高校生の場合には、2004年度の大学等への進学率は61.9%である）。

＜表3＞ 知的障害養護学校中等部および中学校特殊学級卒業者の進路

年度	卒業者	卒業者 人	進学者 人 (進学率%)	職業訓練 機関等入 学者 人	就職者 人 (%)	福祉施設 人 (%)	その他 人 (%)
1980	知的障害 養護学校	3,510	1,765 (50.3%)	66 (1.9%)	224 (6.4%)	1,455	41.5%
	特殊学級	13,269	4,997 (37.2%)	1,875 (14.1%)	5,918 (39.9%)	1,199	9.0%
1985	知的障害 養護学校	4,289	2,749 (66.9%)	33 (0.7%)	78 (1.6%)	1,969	40.85%
	特殊学級	11,156	5,272 (47.3%)	1,363 (12.2%)	3,341 (29.9%)	1,180	10.6%
1990	知的障害 養護学校	5,595	3,744 (66.9%)	12 (0.2%)	55 (1.0%)	1,784	31.9%
	特殊学級	10,372	5,867 (56.6%)	910 (8.8%)	2,461 (23.7%)	1,134	10.9%
1995	知的障害 養護学校	4,401	3,600 (81.8%)	14 (0.3%)	11 (0.2%)	607-	169 (3.8%)
	特殊学級	8,229	5,816 (70.7%)	641 (7.8%)	1,072 (13.0%)	700	8.5%
2000	知的障害 養護学校	4,278	4,015 (93.9%)	2 (0.0%)	10 (0.2%)	171	80 (1.9%)
	特殊学級	8,018	6,685 (83.4%)	373 (4.7%)	372 (4.6%)	588	7.30%
2003	知的障害 養護学校	4,592	4,414 (96.1%)	-	5 (0.1%)	131	42 (0.9%)
	特殊学級	9,248	8,075 (87.3%)	337 (3.6%)	293 (3.2%)	543	5.9%

<表4> 障害児学校中学部及び高等部生徒数の推移 単位：人

学校 年度	盲学校		聾学校		養護学校	
	中等部	高等部	中等部	高等部	中等部	高等部
1955	2,150	1576	4,387	3719	108	5
1960	2,144	3769	5,299	5031	1,684	179
1965	2,500	4915	5,391	4561	6,073	749
1970	2,166	4752	3,877	4770	8,741	2,684
1975	1,577	3838	2,924	5048	11,978	7,234
1980	1,289	3257	2,640	4686	21,806	13,238
1985	1,212	2997	1,739	4119	24,713	22,030
1990	768	2434	1,748	3692	21,744	30,799
1995	585	2231	1,334	3011	18,710	30,409
2000	491	2024	1,400	2677	18,798	34,575
2001	471	1973	1,421	2593	19,451	35,494
2002	510	1871	1,383	2479	19,652	36,856
2003	508	2012	1,171	2463	19,963	38,196
2004	497	1999	1,112	2434	20,275	39,870

<表5> 知的障害養護学校高等部卒業者の進路

年度	卒業者 人	大学等・専 攻科進学者 (進学率%)	専修学校・ 職業訓練機 関等入学者	就職者 人 (%)	福祉施設 人 (%)	その他 人 (%)
1980	1,917	15 (0.8%)	169 (8.8%)	1,109 (57.9%)	624	(32.6%)
1985	3,848	28 (0.7%)	284 (7.4%)	1,453 (37.8%)	2,983	(54.1%)
1990	6,669	37 (0.6%)	135 (2.0%)	2,711 (40.7%)	1,134	(10.9%)
1995	7,416	46 (0.6%)	14 (0.3%)	1,072 (13.0%)	700	(8.5%)
2000	8,205	60 (0.7%)	188 (2.3%)	2,216 (27.0%)	4,761 (58.0%)	980 (11.9%)
2004	9,414	81 (0.9%)	260 (2.8%)	2,180 (23.2%)	5,431 (57.7%)	1,462 (15.5%)

② 障害児の青年期形成と専攻科への期待

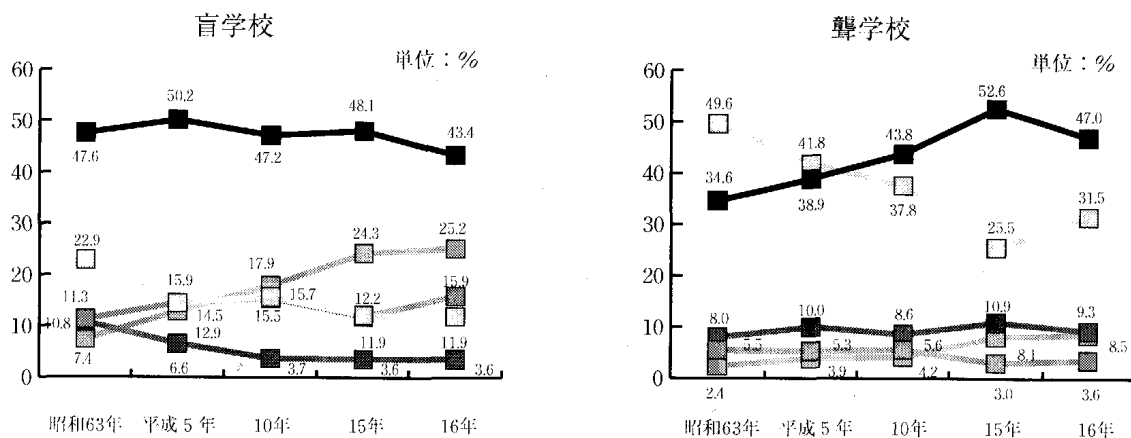
障害児とその親をはじめ関係者が専攻科に寄せる期待とは一体何なのか、専攻科にはどういった意義があるのか、そして、専攻科をつくる運動をどう展開していくのかということについて考えてみる。

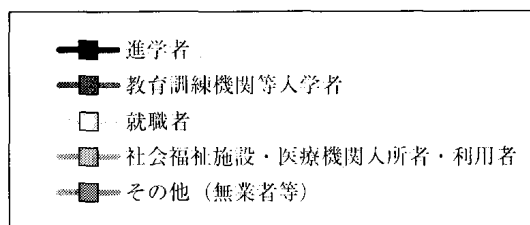
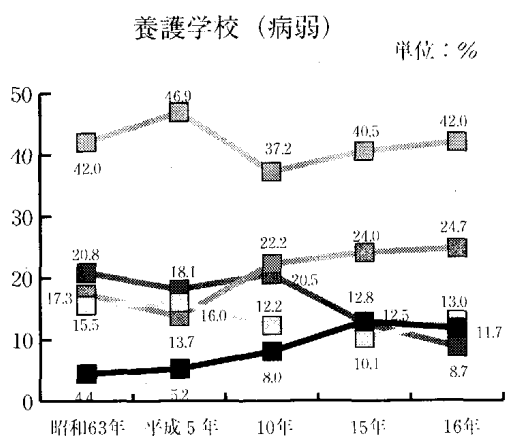
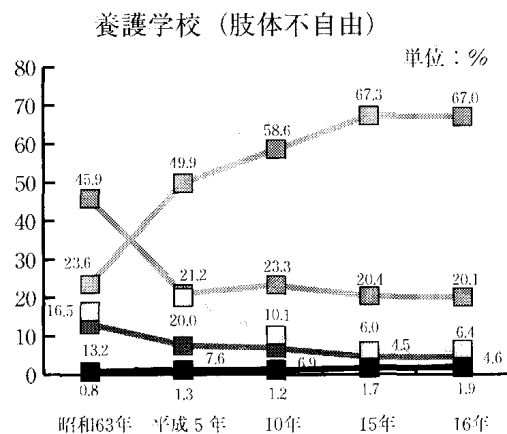
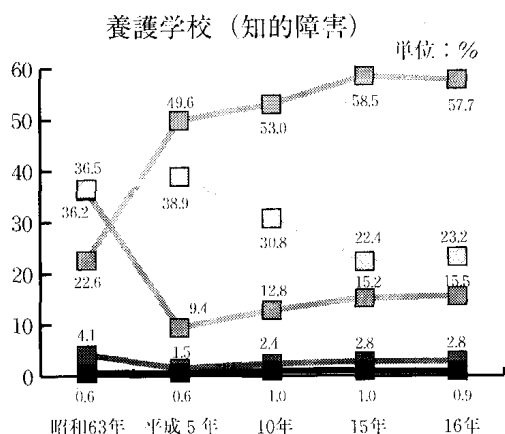
1) 主体的に生きる力を身につけ、社会へ飛び立つためには、さらに教育期間の延長が必要である

いま高等部には、障害児学級や通常学級から、LD・ADHDなど軽度発達障害の子どもたちが多数入ってきている。その子どもたちが、ありのままの自分らしさを出せるようになり、人間関係や社会性を身につけて巣立っていくためには、高等部の3年間は余りにも短い。そのような窮屈な教育の中で、無理やりに就職させてみたものの、結局うまくいかなかったということは日常茶飯事である。

親や教師にあてがわれるのではなく、自分の人生は自分で決め、主体的にいきていけるような力を身につけるには、もう少しの教育期間が必要である。それが高等部や高校卒業後の専攻科教育なのである。今日、沢山の同年齢の子どもたちが短大や大学に行く。教育（期間）の機会均等の原則にたてば、きわめて正当な要求であると言わなければならない。

<表6> 高等部（本科）卒業後の進路





## 2) 豊かな青年期の形成とトランジション（移行）教育の場である

専攻科を設置し、養護学校高等部5年一貫教育を基本とすることによって、何よりも教職員は子どもとじっくりと向き合い、丁寧に寄り添うことが可能になる。教師に支えられ、友だちとの学び生活のなかで、自分のこれまでの殻を破り、自分の思いを素直に表現できるようになってくる。そのような自分くずしから自分づくりへの成長過程で、ありのままの自分を受けとめられるようになるとともに、また、まんざらでもない自分を発見していく。このような青年期の彼らの発達・成長のプロセスや特性を踏まえた、彼らが主体の学校づくりや、授業づくりが求められる。1) ゆっくり、ゆったり、しなやかに 2) 自由な自己表現を大切に 3) 生活や興味・関心にもとづきゲームなど遊び感覚で 4) いろんな人たちとの交わりのなかで 5) 豊かな経験を積み重ねる 6) 年齢に相応しい誇りを育てる 7) 父母が参加し協働する、という視点に立つことが大切である。このように豊かな青年期教育と青年の学びの場が

専攻科である。専攻科はまた、子どもたちが、学校から社会へ飛び立つために、ゆっくりと羽を休め、やがて力強く羽ばたいて巣立っていくことを準備するトランジション（移行）教育の期間ともいえる。

ところで、専攻科がこの子たちの最終の教育の場なのではない。21世紀に入り、人間は誰しもが学びたいときに学べる生涯学習の主体者にならなければならない。そのような学ぶ力を身につけることも専攻科教育の大切な課題の一つである。愛知県立大学で、オープンカレッジ「LD青年のための大学教育入門」（全15回）を実施して3年目になる。見晴台学園専攻科の生徒など26人が、毎回楽しみに通ってきている。彼らが生き生きと学ぶ姿を見るにつけ、大学教育を希望する全ての人にと願わずにはおれない。<sup>9)10)</sup>

### 1) 高等部及び盲・聾学校専攻科の職業教育偏重を是正し、子どもたちの全面的発達を追求する特別支援教育の実現をめざす

障害児教育では、国＝文科省の教育内容政策によって、戦後一貫して職業教育が重視されてきた。1988年12月、障害児教育諸学校学習指導要領の改訂にあたって、教育課程審議会答申は、「高等部における職業教育の充実を図ること」を三つの重点事項の一つに掲げた。そして、1989年度に学習指導要領の改訂では、知的障害養護学校高等部にも職業学科が設置され、また、普通科に職業コース等の設置や職業に関する科目の導入が図られた。

その後、高等部が増え続け、生徒の障害の多様化が進むなかで、1996年3月、文部省・調査研究協力者会議は、「盲学校、ろう学校及び養護学校の高等部における職業教育等の在り方について」という報告書をまとめ、「社会の変化や生徒の実態等に応じた適切かつ効果的な職業教育及び進路指導等を一層充実していく必要」を強調した。そのなかで、障害の軽い子を対象に職業教育を実施する高等部だけの養護学校の設置が相次ぎ、障害の軽い子には高等養護学校などで職業教育を、その他の子どもたちには職業コースをあてがうなど、職業教育の多様化が進められた。

いっぽう、このような障害程度による能力選別＝差別的傾向を強める職業教育重視の障害児教育・高等部教育の在り方に対して、卒業生の実態を通してその見直しが提起されてきた。それは、「人間関係を取り結ぶことのできる調和



のとれた人間性の育成」を目指すということである<sup>10)</sup>。

専攻科づくりの実践・研究は、従来の障害児教育・高等部の在り方を見直し、青年期の豊かな人間発達と社会参加を目標に、障害児教育の全体構造の中に職業教育も正しく位置づけて取り組むことを課題にしている。

### 3. 全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会の発足と活動

#### ① 発足まで

2001年10月、「どんなに障害があっても、高等部で終わらせることなく、もっと学びたい！もっと自分探しや、友だちとのかかわりを通して、失敗したり、悩んだりしながら青年期を豊かに膨らませたい！そのために教育を受ける機会をもっと増やしたい！」と、和歌山県内のきのかわ、紀北、紀伊コスモス、和歌山大学付属の4養護学校の保護者6人が『専攻科を考える会』をつくった。そして、子どもたちの「土曜教室」の開催、母親大会での訴え、障害者の青年期教育全国集会や全国障害者問題研究会全国大会に親子で参加するなど、ともに楽しみながら学びあうことを大切に生き生きとした活動を展開してきた<sup>12)</sup>。

2003年5月、3回目の「専攻科を考える講演会」の参加者も100人に達するなど（1回目が67人、2回目が77人の参加者）、専攻科に対する関心は広がり始めた。また、2003年度には、和歌山の紀伊コスモス養護学校と和歌山大学附属養護学校の高等部から各々1名ずつの計2名が、この年に設置された八洲学園高等専修学校専攻科（大阪府堺市）に進学した。和歌山から進学可能な専攻科は、養護学校聖母の家学園と八洲学園の2校になった。その後、きのかわ養護学校高等部では2004年3月卒業生20人中7人（35%）、2005年3月卒業生20人中8人（40%）が専攻科進学をするなど、和歌山の養護学校から専攻科に進学する生徒が年々増えてきている。このように和歌山の専攻科設置をめざす運動は、知的障害養護学校高等部の進路先の一環として、近隣の府県の私学に専攻科設置を促し、積極的に生徒を送りだすこと<sup>13)</sup>、そして、専攻科進学の実績と進学した生徒たちの育ちを共有しながら、県内の公立養護学校等に専攻科設置の運動を広げていくというところに特徴がある。

2003年11月、和歌山で、「専攻科を考える会」（和歌山）と専攻科を設置して

いる見晴台学園（愛知）、養護学校聖母の家学園（三重）、やしま高等専修学校（大阪）の四者による「専攻科実践交流集会」が開催された。その場で、「全専研」結成の「呼びかけ」が行なわれ、1年後をメドに全国的な組織を立ち上げていくことが確認された。

## ② 出発期の活動

### 1) 第1回全国専攻科研究集会と第1回設立総会

およそ1年間の諸準備期間を経て、2004年11月6日、大阪府堺市で「全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会（全専研）第1回設立総会」及び「第1回全国専攻科研究集会」が開かれた。会則の第2条（目的）では、「この会は、特別なニーズ教育を必要とする青年達の専攻科、大学や生涯にわたる学習の充実、発展をめざす」としている。そして設立記念講演で私は、「青春花開く特別ニーズ教育を築くー専攻科づくりの運動・実践・研究が目指すもの」と題し、専攻科づくりの課題は、1) 教育年限の延長、2) 青年期教育の充実、3) 就労・社会参加に向けたトランジッション（移行）教育、4) 生涯の学びに向けた準備教育、5) 大学教育への展望を図っていくことであると提起した。そして、この研究会の課題として、①専攻科教育の研究、②卒業後の就労・社会参加の研究、③青年期の本人・家族支援の研究、④生涯にわたる学び・支援の研究、⑤大学における特別なニーズ教育の研究等について、そして、そのために、高等部教育、生涯学習、大学教育との連携・協働が必要であると提起した<sup>14)</sup>。

### 2) 第2回全国専攻科研究集会と第2回定例総会

以上の提起を受け、これにほぼ沿う形で、2005年10月22日、四日市市で、第2回全国専攻科研究集会が開かれた。以下は、分科会構成とその内容である<sup>15)</sup>。

番号	分科会名	主な内容	提案者	司会	共同研究者
1	専攻科の教育実践1	障害の重い人の高等部から専攻科へ 障害の重い人の専攻科の取り組み	安達俊昭(やしま学園高等専修学校) 金井辰也(養護学校聖母の家学園)	稲垣恵子(養護学校聖母の家学園)	田中良三(愛知県立大学) 辻正(養護学校聖母の家学園)
	専攻科の教育実践2	障害の軽い人の高等部から専攻科へ 障害の軽い人の専攻科の取り組み	関戸優子(やしま学園高等専修学校) 辻和美(養護学校聖母の家学園) 井上雅博(見晴台学園)	大竹みちよ(見晴台学園)	谷口充(やしま学園高等専修学校) 小畑耕作(和歌山県立紀北養護学校)

2	大学、地域での学び	生涯にわたって学び合える喜び ・オープンカレッジ ・青年学級・市民講座	平井 威 (都立七生養護学校) 草羽俊之 (広島市立広島養護学校)	軽部誠一(神奈川県立鶴見養護学校) 船橋秀彦(茨城県立水戸飯富養護学校)	藤井克美 (日本福祉大学) 岡本真吾 (鳥取短期大学)
3	卒業後の生活、就労支援	豊かな生活とは？ (就労、余暇、趣味) 自分らしい生き方	鬼頭美也子(自立支援センターるっく) 山下達(養護学校聖母の家学園) 田中浩子(わかたけ萩の里)	大田昌彦 (和歌山県立紀伊コスモス養護学校)	木全和巳 (日本福祉大学)
4	本人参加の分科会	自己アピール (仕事、趣味、勉強、恋愛など)	参加者	渡辺桂子(やしま学園高等専修学校) 竹川高広(養護学校聖母の家学園)	藪 一之 (見晴台学園)
5	保護者の交流最初の一步から	子育ての情報交換、交流 学校づくりの参加、協働 親同士の育ち合い	聖母の家学園 やしま学園 見晴台学園 各保護者 一般参加者	遠山哲男(NPO法人)学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会) 松下喜美代(和歌山専攻科を考える会)	坂井清泰 (四国学院大学)
6	仲間の集い	今、高等部や専攻科で学ぶ生徒たち卒業生たち集まろう！！	参加者みんなで歌ったり、踊ったり楽しく過ごそう！！	後藤 剛(施設聖母の家) 松山和幸(わかたけ萩の里)	

また、第2回定例総会の活動報告と活動方針は次のようである。

<2004-2005活動報告>

1. 2004年12月 中教審「特別支援教育を推進するための制度の在り方について」(中間報告)に対するパブリックコメント
2. 2005年3月 発達保障研究集会(京都)「専攻科について考える」発表  
6月 全専研会報(1号)発行  
青年期教育全国研究集会(仙台)参加・発表  
9月 日本特殊教育学会第43回大会(金沢大学)自主シンポジウム「専攻科を考える」を主催
3. その他 ホームページを開設

<2005-2006活動方針>

1. 文科省等への要望書提出
2. 第3回全国専攻科研究集会及び「公開授業」の開催(以下、予定)

2006年11月11日(土) 愛知県立大学

◇ 11月10日（金） 見晴台学園（名古屋市）

3. 日本特殊教育学会第44回大会（2006年、9/16～18、群馬大学）にて、  
自主シンポジウム開催
4. 全国障害者問題研究会主催「発達保障研究集会」（2006年3月25～26日、  
京都）への協力・連携
5. 第6回全国LD実践研究集会（2006年2月11～12日、愛知県立大学）へ  
の協力・連携
6. その他（ブックレット+DVDなどの編集・発行を検討）

## おわりに

1960年代から70年代の障害児の不就学をなくす運動は、1979年度養護学校教育の義務制実施を実現させた。この障害児の最初の教育権保障運動を土台に、1980年代から90年代にかけて、希望する全ての障害児に18歳までの高等部教育をめざす運動が繰り広げられた。この専攻科づくりの運動は、20世紀最後の10年間に取り組まれた第二の教育権保障運動の発展として、21世紀のできるだけ早い時期に、すべての障害児に20歳までの教育年限の延長が実現することをめざしていきそしてまた、この専攻科づくり運動は、新たに、障害者の生涯にわたる第三の学びの扉を開けようとするものである。第三の学びの扉の向こうには、人生の学びへの自由な道が大きく開かれるである

このように、専攻科づくり運動は、権利としての障害児教育の歴史的発展の見地にたち、障害の重い子をはじめ、LD・ADHD・高機能自閉症など軽度発達障害の子どもなど特別なニーズ教育を必要とするすべての子どもたちに、人間的豊かさの形成と社会的自立をめざして教育年限の延長を図り、生涯にわたる学びを拓いていくことによって、これまでの障害児教育の充実・発展として特別支援教育を創造していくことを目的としている。

## 注

- 1) 田中良三「専攻科」『障害児教育大事典』旬報社、P518
- 2) 國本真吾「高等部専攻科」『キーワードブック 障害児教育』クリエイツかもがわ、PP218-

219

- 3) 小畑耕作「基調講演」資料1 (全国専攻科研究会第2回研究集会、2005年10月22日、四日市市勤労者総合福祉センター)
- 4) 同上、資料2
- 5) 『精神薄弱者問題白書』・『発達障害白書』各年度版より作成
- 6) 文部科学省ホームページより作成
- 7) 文部科学省ホームページより
- 8) 5) と同じ
- 9) 田中良三・養護学校聖母の家学園編著『養護学校専攻科の挑戦』かもがわ出版、1999年7月
- 10) 田中良三「もっと学校で学びたい！—高等部専攻科とは何か」『みんなのねがい』2003年11月号、PP. 18-20
- 11) 田中良三「『職業教育の充実』がめざすもの」『わたしたちの障害児教育と新学習指導要領批判』全障研出版部、1999年8月、PP. 129-144
- 12) 松下喜美代「専攻科設置をめざして～青年・保護者の思い」『みんなのねがい』2003年11月号、PP. 12-13
- 13) 3) と同じ、資料(表4、表5)。以下の資料も3) に同じ。

和歌山県盲・聾・養護学校卒業者の進路状況(2005年3月)

		卒業生数	進学	就職	施設	家庭	その他
和歌山盲学校	本科	4	3			1	
	専攻科	6		3		3	
和歌山ろう学校	本科	5	5				
	専攻科	2	1	1			
きのかわ養護学校		20	8	1	8	1	2
紀伊コスモス養護学校		22	1	1	16		4
紀北養護学校		25		6	12		7
たちばな養護学校		18		6	9	2	1
みはま養護学校		3	2				1
南紀養護学校		4			2		2
はまゆう養護学校		20	3	2	13		2
みくまの養護学校		8			8		
和大附属養護学校		9		4	5		
合計		146 (100%)	23 (15.8%)	24 (16.4%)	73 (50.0%)	7 (4.8%)	19 (13.0%)

- 14) 『第1回全国専攻科研究会報告集』2005年5月
- 15) 『全国専攻科研究会第2回研究集会要旨集』2005年10月
- 16) 「鳥取大付属養護学校高等部 来春、専攻科を開設」日本海新聞2005年6月1日・24日
- 17) 田中良三「第三の学びの扉を開けよう！～ともに学びあう喜びをすべての子ども・青年に～」(全国専攻科研究会『会報』1号、2005年6月、P1)